88130115

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Friday 8 November 2013 (morning)
Vendredi 8 novembre 2013 (matin)
Viernes 8 de noviembre de 2013 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2013

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

詩を書いていておもしろいのは、いちおうコトバを使って詩というものは書かれるので、なかなかコトバが使えないということである。これは逆説ではない。たとえば、ジツゾンを書くといって、私は実存というコトバが使えない。詩で実存というコトバを各行ごとに書き並べても、その詩はジツゾンはおろかなんにも伝えてこないので、ジツゾンもヘチマもないのである。詩を書いているうちに、コトバへのこういう態度が多少は身についてくる。だれだって、ああこのゼツボーよ絶望よ、なんて書かれても、なにいってんだと思うだけであるし、ゼツボーとは薬の名前かもしれないのである。

それはそれとして、わたしは自分が浮かんでいるのではないかと感じているので、つまり、なんだかこの地球の上をハダシで歩いているのでなくて、地面から十センチくらいのところを歩いているかんじがするので、地に脚をつけて生きよう、とか、この大地を踏みしめて、というようなことがなかなか味わえない。大地を踏みしめていないので、台所で葱をきざんでいるのに、台所も家もどこかへいって原っぱで葱をきざんでいることにもなるのである。ただし味噌汁がふっとうしているので葱をきざまなくてはならない。

わたしが浮かびはじめたのはそんなに昔からではなくて、或る日わたしはわたしのまわりのだれかれが喋(しゃべ)ったり会話したりしているコトバがとつぜん聴えなくなって、にんげんのコトバは空間に飛びまわっている気配はするけれども聴えなくなった。正確にいうとにんげんのコトバがかわされているのは聴えているが意味が聴えなくなった。にんげんの喋る音声は鳥や動物の音声より、意外にも単調でわりあいたいくつである。死者の森を歩くとどういう声やコトバが聴えてくるのか知らないが、生きているにんげんの世界で聴く声もきわだってイキイキしていないという気がする。

お経の本や哲学の本や歴史の本などにはいろいろのことがおそらくわかりやすく書いてあると思われるけれども、聴えてくる声はだいたいいつもおなじで、おなじことをくりかえしていて、それでいてなんとなくひとびとは進歩していって、というよりそういう様子なので、だんだん、挨拶するコトバもどうしていいのかわたしにはわからなくなっていった。

多分、わたしが街路に立って、アーと叫んでも振りかえるひともあり振りかえらないひともあって、わたしのアーは間投詞であるから意味はなくて、だれかに喋ったわけではない。だれかに喋ろうとしても、駅はどこですか、くらいしかいえなくて、死ぬときのハナシなんてディナーの時にすると顔をしかめられる。

https://xtremepape.rs/

ところが地面から十センチくらい浮いていると、脚は二本あるけれども少々はユーレイ的になるのかもしれないから、自分に、なんだかんだとたいくつさせないために喋っていてもよかった。ふわふわとお風呂にはいってふわふわとあがってきて、ナイトドレスに着がえて、ふわっと椅子にかけてビールをのむ。ふわふわの椅子は、別に北を向いていてもいいし、東の方のトイレの方を向いていてもいいし、かならず窓の方を向いていなくてもよかった。

だからたえず椅子にすわるとき、さてどっちを向いてすわろうかということになってきた。このことが浮かんで歩いているあいだ、いつも頭の中を占めている。歩いているときも、地面の上を歩いているなら辻があれば曲ればいいが、ふわふわに浮いているとどこへいってどこを曲るかもわからない。わたしにとってたえずどっちを向いてすわるか、どっちの方に散歩するかどっちの方へ顔を向けるかどっち向いてねるか、という風なわりあい具体的なことがハナシのたねになっていた。

（富岡多恵子『ニホン・ニホン人』「コトバ・ことば・言葉」一九六八年）

（a）　作者にとって言葉はどのようなものですか。また、それを作者はどのように表現していますか。

（b）　この文章の表記法上の特色とその効果について述べなさい。

https://xtremepape.rs/

2.

Birdie

ものういどよめきが
森を大きくひろがらす
小鳥の眼は
あおい空を見、枝の下のくろい土を見る
小鳥は落ち
落ちて固くなるまでにすこしの時間があった

犬は喜んで駆け
狩猟者は悠々（ゆうゆう）と足をはこぶ
太陽はなにごとにも関心を示さぬ様子で
一流の女優のように
にこやかにほほえんでいた
このちいさな死を誰が悲しんでいるか、誰も知らない

そうだ、僕の心に住む小鳥は
いつもこうして死んでゆくのだ
そしてまた、すぐに新しい小鳥が
どこからか翔（と）んできて新しい巣をつくる
だが僕にはまったく予言できないのだ
いつ、その小鳥が来なくなるかは。

（中桐雅夫「Birdie」一九六四年）

（注）

Birdie　小鳥、かわいい小鳥。

（a）　作者と小鳥の関係について解説しなさい。

（b）　詩中に現れる比喩とその効果について述べなさい。

https://xtremepape.rs/